



「わたしの原点」

Hiroshima21代表 黒川 功 嗣
KUROKAWA一級建築デザイン事務所
広島工業大学 昭和53年卒業

■建築に興味を覚えたころ

私の田舎は、情緒あふれる旧家が立ち並ぶ香川県の金比羅さんという門前町にあり、私はそこで18歳まで過ごしました。小学校低学年のころ、東京のある大学が町並みを測量に訪れ、石段に立ち並ぶ家々を一件一件詳しく調査し、図面を描いているのを見たことが、私の一生を決めたと今では考えています。

それまで一度も図面など見たこともない私にとって、我が家を白い紙の上で見た時の驚きは、まるで魔法にかかったかのようにいつまでも眺めていました。その後は遊びも忘れて出来上がった友人宅の図面を見ては、ちゃかしたり驚いたりしながら、一日中大学生の後をつけ回した記憶があります。

そのことを忘れかけていた中学生のころ、軒先が低く連続性のある古い家々が取り壊され、新しい家が少しずつ増えると、小学生のころに図面で見た“心地よさ”とは違う何とも言えない違和感を感じました。このころから建物に興味を持ち始め、高校は迷わず工業高校建築科に進みました。

高校では、社会に出てすぐに役立つカリキュラムが多く、私の感じた違和感の答えは見つからないまま3年間で過ぎ、この違和感の答えを求めてその時代では珍しく工業高校から大学へと進学しました。

■恩師への思い

大学へ入学した当時は、高校時代に感じた“建築への想い”を目指して勉学に励もうと考えていましたが、田舎から出てきた私にとって見るもの全てが新鮮に映り、初めての一人暮らしの開放感から“建築への想い”のことなどすっかり忘れ、遊びとアルバイトに明け暮れ1年生の終わりには下宿から追い出される始末でした。それでも懲りずに2年生も遊びとアルバイトで意味のない日々を過ごしていました。

3年生の時、先輩が設計コンペで入選したことを知り、驚きと共に自分自身を振り返り後悔の念にとらわれました。「このままでいいのか?」と考えている時、友人の勧めもあり佐藤 洋(現 環境デザイン学科)先生のゼミを受けることにしました。

佐藤先生は体調を崩されいて、2~3回しか教えていただけなかったのですが、その中で「感動を受けた建物があればその建物を何度も繰り返し見ること。そしてどこに感動を受けたか理解できるまで図面を何度も繰り返して描くこと。それによってその建物の良さと設計者の意図が自分なりに解ってくる。その繰り返しが自分自身の力だよ。」とおっしゃったことは、今も私の考えの基礎となっています。

その後、水田先生と出会い、初めて建築と出会ったような感動的なカルチャーショックを受けたことを今でも覚えています。線のタッチひとつから違っていたのです。今までの自分はドラフターマンだと考えるようになりました。

“建築”という言葉が息づき、私に語りかけてくるようで毎日が楽しく、ゼミ室に泊まり込み約2年間を過ごしました。この時“空間”という言葉を知り、“物の見方”を教えていただき、高校時代から感じていた違和感を自分なりに理解することができました。



初めての作品

■就職から独立

ゼミに泊まり込み卒業研究に没頭していた私は、就職に対しては全く無頓着でした。いざ本格的に就職を考えると、建築業界はオイルショックの後で就職難の時代を迎えていました。就職できそうな会社がなく困り果てていた時、友人から大手住宅メーカーの試験日を教えられ、会社の内容も知らないままに試験を受け、運良く合格しました。他に就職先もなかったのでこの会社にお世話になることに決めました。

入社して初めて仕事の内容を知り、大学で培った知識を活かすことができると思い、偶然の出会いに感謝

すると共に、より一層建築のことを勉強しなければならないと心に誓いました。

入社当初は主に木造住宅の設計を担当し、施主と打ち合わせながら詳細図面まで描き、現場では職人さんとおさまりを確認しながら物造りの苦労や楽しさを学び、その後店舗などの非木造の設計を先輩達から教わりました。また地方への転勤が幸いして数多くの建物を観ることもでき、多くの知識を得る機会に恵まれ充実した時間を過ごすことができました。

ひとつひとつドラフターを使って細かいスケッチやデッサンを繰り返しながら、人にとって“住まう”とはどういうことなのか？人にとって“心地よく住まえる住宅”とはどんな住宅なのか？を考え、住まう人の感性とオリジナリティーを表現する設計を心がけていましたが、時代の流れでコンピューターを用いた住宅の規格化が進み、図面の処理が早くなったのは確かですが、そこには住宅に住む人のおいがなくなり、機能面だけの住まいやすさだけが残ったように思えました。

設計士の醍醐味が薄れたような気がして毎日が空しく、大学時代建築のことだけを考えていた頃が懐かしく、その思いが日々募り「今だったらやりたいことができる」と、退職を決意しここ広島で設計事務所を開きました。



老人保健施設遊歩道

■先輩の立場になって

現在、もの創りに情熱を持つ建築家と、インテリアコーディネーター、フラワーデザイナー、グラフィックデザイナーなど感性豊かなクリエイター達が“もの創り”を通して集まったグループ『Hiroshima21』の代表を務めています。

この中には工大生も含め各大学の学生も参加しています。私と違って若い人達は最初からコンピューターを使って図面を描くことが当たり前になり、そこには人間の眼を通したスケール感が欠如しているよう思えました。共に作品を創ることで人間のスケールでものを考える心と、完成したもののイメージが現実とは違うことの経験を将来の糧に役立ててほしいと思います。



大学生との共同作業

■Hiroshima21の活動

Hiroshima21では、一人一人が自分で創りたいものを現実化することを目標に日々活動に励んでいます。

来る6月23日(日)～30日(日)、広島で異才を放つクリエイター達を線で繋ぎ、多くの人に新しい発見や出会いを提供し広島を活気づけることをコンセプトに、デザイン、アートの展示・住まいに関する提案・ブライダルフェアなどを旧日銀広島支店をメイン会場に、市民参加型のイベント『広島デザイナーズフェスタ2002』を開催します。

この企画を成功させるため、地域のデザイナー・芸術家・学生・ボランティア・ブティック・インテリアショップ・雑貨店等、約50店舗が集結し力を合わせ、一丸となって活動を続けています。



広島デザイナーズフェスタ2002

最後に、大学時代に培ったことはこれからも私の原点になると確信しています。 —感謝—